

【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和3年度学校評価 結果

達成度（評価）
A：十分達成できている
B：おおむね達成できている
C：やや不十分である
D：不十分である

1 前年度 評価結果の概要	項目別三者比較より、『学校教育目標の周知について』、保護者の達成率が67%と低かった。保護者は行事や授業参観等への出席率は高く、学校への関心も高い。学校教育目標の周知のために情報発信の機会を増やす必要がある。また、『授業はわかりやすいか』については、児童生徒の達成率が100%であったのに対して、保護者の達成率は50%であった。さらに、『家庭での学習は定着しているか』に関して、保護者の達成率は33%とかなり低い結果となった。また、経年比較より、『一人一人を大切に作る学級経営』や『みんなの前で自分の考えなどを発表できたか』など、児童生徒の学習・学校生活に関することについては、全ての項目の平均点で高い達成率を示した。今後も校内研究に全職員で取り組み、「スピーチタイム」の充実に加え、他校との交流授業も進化させるなど、この島の学校でよかったと思ってもらえる学校づくりに組織的に取り組んでいく。
2 学校教育目標	自立・貢献 ～ 未来へはばたく子どもたち ～

3 本年度の重点目標	(1) 児童生徒一人一人に応じたきめ細やかな学級経営の実現 (2) 確かな学力の育成と進路保障 (3) 児童生徒の問題発見・解決能力を育成し、自分の意見を積極的に表現できる児童生徒の育成 (4) 島を愛し、島の文化を大切にすることの育成 (5) 業務内容の見直しを通し、やりがいと魅力のある職場環境の創造
------------	--

4 重点取組内容・成果指標 中間評価 5 最終評価

(1) 共通評価項目				中間評価		5 最終評価		学校関係者評価		主な担当者
評価項目	重点取組 取組内容	成果指標 (数値目標)	具体的取組	中間評価		最終評価		学校関係者評価		
				進捗度 (評価)	進捗状況と見通し	達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言	
●学力の向上	●全職員による共通理解と共通実践・基礎的・基本的な知識・技能の確かな習得	○学力向上アクションプランの評価の平均が3以上	・教職員間でアクションプランを共有するとともに、校内研修等により授業研究会等を行い、取組の促進を図る。	A	・学力向上アクションプランの2学期の平均は3.28で3を超えている。また学力向上に関する個人の取り組み内容や成果指標を職員間で共有した。 ・授業研究会等の校内研修を計画的かつ積極的に進めている。	A	・学力向上アクションプランの1、2学期の平均は3.4で3を超えている。また学習状況調査の結果を全職員で共有しこれからの指導に活かすことができた。 ・校内研究の研究仮説に基づき、それぞれの校種で実践を重ね、思考力や判断力の向上に結びついた。	A	・島の子供たちのために尽力いただき、感謝している。今後も、子ども達の将来を見据え、一人一人の先生方の思いに沿って指導してほしい。	
	○思考力、判断力、表現力の育成	○校内研究テーマに基づき、思考力、判断力、表現力を高める授業の研究に取り組んだ教師85%以上	・同じ校内研究テーマに基づいて小中がそれぞれに研究仮説を立てて研究を進め、授業の導入の研究やワークシート等の開発、個に応じた指導に取り組む。	A	・研究授業に向けて、小中それぞれ事前検討会を重ね、協力して研修に取り組むことができた。 ・小学校においては、全員が指導案を作り、授業公開を行った。	A	・研究授業については、事前検討会・授業・事後研究会を通して職員全体で関わり充実したものとされた。 ・小学校においては、全員が指導案作成のうえ、研究授業を行い、研修を深めた。 ・校内研に沿った授業研究に取組んだ教師100%であった。	A	同上	
●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○道徳アンケートや人権集会などのアンケートに、自分の思いや考えを書いた児童生徒80%以上	・道徳や人権集会に関するアンケート、心の健康アンケートの実施 ・道徳科の授業づくりや評価に関する小中委員会等の実施	A	・道徳アンケートや人権集会などのアンケートに自分の思いや考えを書いた生徒は100%であった。 ・道徳科の授業づくりを、職員で協力しながら進めている。	A	・児童、生徒の生活の様子について、1年を通して定期的に情報交換をする時間を設けることができた。些細な事でも情報共有することができたため、全職員での早期発見、対応により大きな問題が起こることはなかった。 ・いじめのない学校づくりのために努力していると答えた職員が100%であった。	A	・子供たち同士、仲が良いことはとてもいいことだ。ただ、時にはぶつかり合うこともあると思うが、それも子供たちにとっては良い糧だと考える。ぜひそういった考えで指導してほしい。	
	●いじめの早期発見、早期対応体制の充実	○いじめ防止等(いじめの定義、いじめの防止等のための取組、事案対処等)について組織的対応ができていると回答した教師80%以上	・いじめの認知・覚知に対する対応マニュアルを全職員で共有し、必要に応じて見直しを行う。 ・いじめの対応についての研修・会議を年間に2回以上行う。	B	・いじめの認知・覚知に対応するマニュアルを見直すことができた。 ・児童、生徒の生活の様子について、毎月の職員連絡会時に情報交換の時間を設けている。 ・いじめの対応についての研修・会議を1度行った。	A	同上	同上		
	○地域について学ぶ授業や地域との交流活動計画し、郷土愛を育てる。	○アンケートにより、小川島の良いところや課題について、80%以上の児童生徒が記述することができた。	・島ならではの行事や島の方々との交流活動を年間計画に組み入れ、担当者を明確にしていく。 ・地域と関連させた学習活動を通して、地域の課題について知り、その解決策等を考えさせる。	A	・担当の役割を明確にし、アイランドフェスティバルやゴルフ、もちつき大会などを実施した。島民の方も多数参加し、地域交流することができた。 ・中学校の総合的な学習の時間の取り組みで、島の職体験に小学生も参加し、ペットボトルゴミの多さに基づき、SDGs17の目標の14「海の豊さを守ろう」について考えるきっかけとなった。	A	・アイランドフェスティバルやゴルフ、餅つき大会で島民の方に参加していただき地域交流ができた。 ・小川島の良いところや課題についてのアンケート結果によると、100%の児童が記述することができた。良いところでは、海や自然が豊かで、音が美しいという回答が多かった。課題点は、ほとんどの児童生徒が海や山のゴミについて記述していた。課題点を考える上で職体験はゴミ問題解決の一歩となった。	A	アイランドフェスティバルでの子供たちの発表に、とても感動した。また、子供たちとのゴルフ・もちつきは楽しかった。今後も、地域と積極的に交流したり、小川島でたくさん体験活動をしつらして、郷土愛を育んでほしい。	
	●「望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成」	●「健康であるためには、まず食事が大切である」と考える児童生徒85%以上 ○朝食をとって登校する児童生徒85%以上	・生活状況調査、食に関する意識調査の実施(児童生徒と保護者対象) ・保健だまりの発行(本校の健康課題を中心とした内容)	B	・食育月間の6月及び11月に「早寝、早起きごはん」の調査を実施した。これにより、保護者の意識向上が伺えた。 ・保健便りでは、月目標が中心の内容となり、今後は食に関する内容も盛り込みたい。	B	・食育月間での調査では、児童生徒及び保護者も関心を持って取り組んでいたが、それが習慣化するには、個人ではつづきがあった。家庭との連携、個別指導に力を入れるべきであった。	B	・食については、家庭との連携が不可欠である。これまでの取組では、変化がないようであれば、学校から家庭への啓発についても、工夫が必要ではないか。	
●健康・体づくり	○基本的な生活習慣の育成	○自分に適した生活リズム(睡眠を含む)を知り、快適な生活を送ることができそうな習慣を実行する児童生徒80%以上	・睡眠の大切さを知らせ、その「質」「量」を年間を通して身に着けさせる。 ・基本的な生活習慣の一つとしての快適な排便の重要性を知らせ、自らの健康を排便によって判断できるようにする。	B	・児童朝会等で定期的に睡眠と健康について触れている。また、早寝、早起き、朝ごはんの情報発信や調査も行っている。 ・排便については、まだまだ触れられていないので、今後情報発信等をしていく。	A	・長期休業の前夜や児童朝会等で定期的に話をする事ができた。また、生活習慣に関する調査も養護教諭と協力して行い、90%以上が肯定的な結果で回答した。 ・排便についても適宜情報発信をし、排便の重要性に気づき、判断できるようになった。	A	・基本的な生活習慣の育成は、家庭の協力なくしてできないことである。そのため、基本的な生活習慣がもたらす多くの好影響を児童生徒だけでなく家庭へも積極的に発信してほしい。	
	●業務効率化の推進と時間外勤務時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外勤務等時間の上限を遵守する。	・小中連携による部活動・社会体育の実施 ・定時退勤日の設定 ・学校閉庁日の設定 ・部活動休養日の設定 ・業務の優先順位設定の推奨	A	・時間外勤務の上限の目安である月間45時間を超え、小3名/6名、中1名/6名であり、小職員はそれぞれ1か月間のみ、中職員は2か月間超過した。 ・現在のところ、教育委員会規則に掲げる時間外勤務時間の上限を遵守しており、取組が上手いれている。	A	・複数の取組の継続による結果、教育委員会規則に掲げる時間外勤務時間の上限を、全職員が遵守することができた。 ・業務記録票には除外時間と換算されているが、小学校社会体育の指導において、均等な振り分けと中学校教員の協力により、小学校教員の負担の偏りがなくなるとともに負担軽減となった。	A	・先生方の健康が、そのまま子供達への指導に影響する。島暮らしで何かと不便な点もあると思うので、休める時にはしっかり休んで子供たちの指導に当たってほしい。	
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	○長期休業中を中心に、年休の取得を促進	○夏季休業中に、5日以上年休を取得した教職員が80%以上 ・年間10日以上年休を取得した教職員が80%以上	・日ごろから年休を取得しやすい職員室の雰囲気を作る。 ・長期休業中は、年休を平均で4日以上取得する。	B	・夏季休業中に5日以上年休を取得した教職員は54%であった。 ・11月末現在、年間10日以上年休を取得している教職員は92%である。	A	・年間10日以上年休を取得した教職員は92%であった。 ・冬季休業中は、年休を平均で4日以上取得することができた。	A	同上	

(2) 本年度重点的に取り組む独自評価項目

評価項目	重点取組 取組内容	成果指標 (数値目標)	具体的取組	中間評価		最終評価		学校関係者評価		主な担当者
				進捗度 (評価)	進捗状況と見通し	達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言	
○教育の質の向上に向けたICT利活用教育の実施	○効果的なICT利活用教育の推進 ○テレビ会議システムを活用した交流の推進	・ICT機器を活用した授業やスピーチタイム等を通じ、15時間以上行う。 ・小学校では、テレビ会議システムを活用した他校との交流授業等を年間15回以上行う。	・電子黒板やタブレットPCを操作する機会を増やす。 ・他の離島と連携し、テレビ会議システムを活用した授業やスピーチタイムを実施する。	A	・毎月1度以上テレビ会議システムを用いて、高島小、加藤小中との交流をしている。 ・一人一台端末未導入され、導入されたデジタル問題を児童・生徒に活用させるために、職員向け研修を行った。	A	・テレビ会議システムを用いて、月に一度以上、他校との交流をし、意見交換することができた。 ・職員向けの、一人一台端末研修会、児童・生徒向けの一人一台端末使い指導を行った。児童・生徒は普段の学習の中で、一人一台端末でデジタル問題集に取り組むことができるようになった。	A	・テレビ会議システムを活用すれば、学力向上だけでなく友達との交流にもなる。人間性より幅広く育んでほしい。 ・コロナ禍でもあるため、緊急時にはタブレット端末を活用し、学びを途切れないようにしてほしい。	
	○キャリア教育における汎用的能力である問題発見・解決能力及び表現力の向上に努め、自らの意思をしっかりと伝えられる児童生徒を育成する。	○自ら設定した課題について、その考察や意見等を分かりやすく、伝えることができた児童生徒70%以上。	・スピーチタイムやスピーチ交流会をはじめ、全ての教科、学校行事等を通して、夢や目標について自ら考えさせたり発表させたりする時間や場面を設ける。	A	・親の仕事についてインタビューをし、総合的な学習の発表の中で活かすことができた。 ・希望する職業について調べ、国語科の時間を使ってレポートを書いた。	A	・テレビ会議システムを用いて、月に一度以上、他校との交流をし、意見交換することができた。医師、体育教師、ICT支援員の方々にインタビューを行い、その結果をまとめ、加藤中学校の生徒や小学生に発表し、自分の考えを深めることができた。 ・県内の私立と県立の高等学校について教師の説明を受け、進学について具体的な展望を持つことができた。	A	・子どもたちは島の宝である。今後も、特に体験を通して小川島を誇りに思い、愛する気持ちを育み、多くの人に貢献できる大人になってほしい。	
○特別支援教育の充実	○教員の専門性と意識の向上	○特別支援に関する専門性が向上した教員70%以上	・全職員向けに特別支援教育に関する研修会を実施する。 ・生徒指導協議会等ですべての児童生徒について共通理解を図る。	A	・全職員を対象にした特別支援教育に関する研修会を実施した。研修を生かして児童理解に務める。 ・生徒指導協議会等で全ての児童生徒について共通理解を図るようになっている。	A	・特別支援教育に関する研修会の実施やスクールカウンセラーとの連携により専門性の向上に努めた。 ・生徒指導協議会等で全ての児童生徒について共通理解を図ることができた。	A	・子どもには一人一人特性がある。先生たちはその道のプロだと信頼しているため、少人数をいかしてその子に応じたきめ細かな指導を期待する。	

●…県共通 ○…学校独自 ◎…志を高める教育

5 総合評価・次年度への展望	・どの項目も、概ね肯定的な評価であった。しかし、来年度更然と取組を継続してしまうと、取組自体が形骸化してしまうであろう。目標をしっかりと定め、目標に沿って絶えず取組を振り返り修正していくことで、さらに学校教育目標が達成されることにつながると考える。 ・特に、子供たちの健やかな成長のための食育として、「朝食喫食率100%」は絶対に達成したい項目である。担当だけに留めず、学校全体として有機的に取り組んでいきたい。
----------------	---